

2021年 3月 26日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 和歌山市屋形町2-23
管理機関名 和歌山信愛女学院
代表者名 理事長 森田 登志子

2020年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

2020年 4月 10日(契約締結日)～ 2020年 3月 31日

2 指定校名・類型

学校名 和歌山信愛中学校高等学校
学校長名 森田 登志子
類型 グローカル型

3 研究開発名

和歌山発！地域の未来を拓く鍵となる「Key Girl」育成プログラム

4 研究開発概要

- ① 地域の抱える課題を最善の解で解決に導きたいという思いのもと、主体的に行動する女性を育成するため、リージョンやグローバル課題、また自己キャリアをテーマとした3つの課題探究型学習プログラムを4年間におよぶSGHアソシエイト校としての経験を活用しながら開発・実践する。
- ② 県外大学への進学率が30年近く全国1位で、才能豊かな若い人材が流出する和歌山県において、本学生徒とコンソーシアム参加機関との協働が、地域全体で地域の未来を考えようという動きへと繋がっていくのか。また、コンソーシアム参加機関および地域に生活する人々との協働から結ばれた「絆」が、どのようにして次世代を担う人材である本学生徒たちに「地元のために奉仕・貢献したい」という思いを芽生えさせるのかについて研究開発し、大都市から地方への人の流れを創出する。

5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
----	------	----

仁坂 吉伸	和歌山県 知事	
富松 淳	和歌山市教育委員会	
宮下 和久	公立大学法人和歌山県立医科大学 理事長・学長	
藤永 博	国立大学法人和歌山大学経済学部 学部長	
大山 輝光	学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 副学長	
平山 恭子	一般財団法人「Future Skills Project 研究会」 事務局長	
渡邊 道子	学校法人産業能率大学 入試企画部企画部長	

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
和歌山県	仁坂 吉伸
和歌山市教育委員会	富松 淳
みなべ町	小谷 芳正
公立大学法人和歌山県立医科大学	宮下 和久
国立大学法人和歌山大学経済学部	藤永 博
学校法人和歌山信愛大学	大山 輝光
一般社団法人女性と地域活性推進機構	堀内 智子
ソロプチミスト和歌山紀ノ川	宮本 安津子
学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校（推進校）	森田 登志子
学校法人和歌山信愛女学院（管理機関）	森田 登志子

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	なし	なし	なし
海外交流アドバイザー	Sr.橋本 進子	ショファイユの幼きイエズス修道会カンボジアカンポット共同体	謝金で対応
海外交流アドバイザー	伊東 邦将	HAPPY SMILE TOUR CEO	海外研修に伴う実費を支払う
地域協働学習支援員	柳岡 克己	学校法人和歌山信愛女学院 学監	管理機関で雇用

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム運営会議	※							○			○	○
運営指導委員会								○			○	

管理機関による独自の支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
--------------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

※4月のコンソーシアム運営会議については休校措置のため中止とした。

(2) 実績の説明

- ・【管理方法】管理機関の長が推進校の校長を兼任しているため、実際のプログラム運営状況の把握や細やかな指示が行われている。
- ・【コンソーシアムの構成】コンソーシアムは指定前の段階ですでに構成し（協定文書はすでに提出済である）、次年度さらに1団体が新たに参入する予定になっている。
- ・【海外交流アドバイザー】コロナ禍で海外研修は実施できなかったものの、次年度も現状が継続するようならば、海外交流アドバイザーとともに、現地を訪問して受ける「衝撃」に匹敵するような動画とオンラインを織り交ぜたオンライン海外研修教材の開発を進めていくことが決定している。
- ・【地域協働学習実施支援員】推進校の入試対策室長を長年務め定年退職した人物を管理機関で雇用している。
- ・【継続】探究学習指導による業務負担の軽減のため、完全複数担任制の実施
- ・【継続】校務支援システム「Siems」の導入
- ・【2020年度】地域協働事業の継続のみを対象としたわけではないが、新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置への対応のため。4月上旬の段階で急遽教育プラットフォーム「Classi」を導入し、学びをとめない環境づくりを実現（4月）
- ・【2020年度】対面型プログラムの中に動画を導入するにあたり、撮影のための備品費用の負担およびICTを活用した教育環境整備のために「ロイロノート SCHOOL」の導入（5月）
- ・【2020年度】Zoomによるオンライン講義およびインタビュー等における45分制限の煩雑さを踏まえ、「G Suit for Education」を導入し、Google Meetの利用を可能に（12月）
- ・【2020年度】本学が幹事校となった全国5校と実施する「カンボジア合同研修会」開催準備のための諸費用の負担（1月）
- ・【2020年度】オンラインの会議および発表の機会の増加に伴い、環境充実のため地域協働事業用のPC（1台）およびiPad（2台）、外付けマイク等の費用負担（2月、3月）
- ・【2022年度から】中学3年段階から「i（inquiry）コース」を1クラス設置し、高校ではそのクラスを核として、現状のプログラムを自校予算で継続していくつもりである。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程 ※数字はコマ数とする。なお、1コマは45分である。

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
高1「リージョン探究」※1	×	2	2	4	4	2	4	6	4	2	△	△
高2「グローバル探究」※2	×	1	2	3	4	3	3	2	4	2	△	△
高3「キャリア探究」※3	×	1	4	2	2	2						

高1「グローバル探究」※4										×	5	1
高2「キャリア探究」※5										△	2	1
カンボジア研修(選抜制)※6				×		×	×	×	×			
合同カンボジア研修会※7								×	3	2		
ミニ探究(教員)※8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
英語で学ぶ授業開発※9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

- ※1・2 4月の×は休校のため。5月は動画配信による実施。1月は本来実施予定ではなかったが休校による遅れのため実施。また、△は発展的な活動期間を示す。
- ※3 4月の×は休校のため。5月はオリエンテーション動画を配信して実施。
- ※4 本来1月からのスタートであったが、「リージョン探究」の遅れが影響し、2月からのスタートとなった。
- ※5 △は、「リージョン探究」の終了が1か月遅れていたものの、当初の予定通り、「未来の“私”の仕事を考える」への応募活動を実施したことを示す。
- ※6 12月の実施のために、10月末日まで模索したが、新型コロナウイルスの影響によって中止を余儀なくされた。
- ※7 本来ならば、同じグローバル型の昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校を始めとする全国4校と、カンボジアからの帰国後、1月上旬に本学を幹事校として和歌山で実施することになっていた。しかし、新型コロナウイルスの影響を受け、各校およびカンボジアと接続し、オンラインで実施した。
- ※8・9 新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置に伴い、iPadや「Classi」、「ロイノート School」などの導入を一気に行った。今年度は全教員に対して、これらの環境への対応を優先したため実施を一時中断した。

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

・ 研究開発の内容

大学進学の際に地元で大学が少ないために、有能な人材を都市部に輩出し続ける和歌山県においてコンソーシアム参加機関の支援を受けながら、3つの探究学習プログラムを通して、地元和歌山県(紀伊)で、人と人とを繋ぎ(Key person)、地域の未来を拓く鍵(Key)となる「Key Girl」を育成することを目的とする。

・ 地域課題研究の内容

a リージョン探究

コンソーシアム参加機関より派遣された6名の講師から、それぞれが抱える地域課題を提示され、その課題に対して探究活動を行う。

b 「グローバル探究」

自分たちの地域の利益のことしか考えられない狭い視野の持ち主となることを避けるため、またグローバル課題へのアプローチがローカルな課題の解決にも有効であるという方法論を身につけるため、SDGsをテーマとし、生徒たちが自ら課題を設定し、探究学習を行う。

c 「キャリア探究」

a およびbから得た学びに、本学の教育の土台である「奉仕・貢献」を加え、自らの人生における「ミッション」を設定し、既存の職業観にとらわれない具体的なキャリアプランを探究する。

② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

現時点では、「総合的な探究の時間」に実施している本事業のプログラムであるが、今年度新型コロナウイルスのために、1年間の遅れは生じているものの、2022年度入学生のために、「ミニ探究」「英語で学ぶ」の取り組みとともに、探究学習を縦軸に据え、各教科および学校行事などを横軸として関連させながら、新しいカリキュラム開発を少しずつではあるが実施している。

③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

今年度は新型コロナウイルスの影響によって中断せざるを得なかったが、全教員が授業の中に「探究」の要素を盛り込むことを意識した「ミニ探究」授業の開発を行っている。そして、その成果を持ち寄り教科会議において本事業との効果的な組み合わせを模索する。それをカリキュラム検討委員会で集約、整理し、指定終了後の2022年度には、新しいカリキュラムを実施する。

④ 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

2020年度より本学の現管理職を除く今後の本学を担う教員を中心にカリキュラム検討委員会が立ち上がった。不定期ではあるが、会議を重ね2022年度より実施予定の新しいカリキュラムのマネジメントを行っている。

⑤ 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

本事業運営グループに所属する10名の教員を中心に、高等学校に所属する全ての教員が本事業の運営に携わり、全学的な取り組みとして認知されている。本事業による各教員の負担は少なくはないが、週に1度の半休制度や複数担任制、校務支援システム「Siems」などの導入を通して、事務的な職務の軽減が行われている。

⑥ カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

- ・カリキュラム開発等専門家 … なし
- ・海外交流アドバイザー … 2名。カンボジアに在住し、海外研修のプログラム内容の充実のために尽力。謝金にて対応する。
- ・地域協働学習実施支援員 … 1名。本学管理機関にて雇用し、学監と兼任。コンソーシアム参加機関および各講師との連絡を行う。

⑦ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

・運営指導委員会

探究学習における有識者や地域の中核を担うメンバーで構成され、年間2度開催される運営指導委員会において指導や助言が行われ、校長および副校長の管理のもと本事業運営委員会および運営グループによって協議し、改善へとつなげる。

・生徒アンケート

新型コロナウイルス感染拡大防止の休校措置に対する対応として導入した「Classi」によって生徒へのアンケートを容易に実施できるようになり、生徒の実感・評価などを運営に反映しやすくなっている。また、本事業により生徒の主体性も向上しており、アンケートを通して具体的な意見を述べるできるようになっており、その意見も改善のヒントとしている。

⑧ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・コンソーシアム参加機関の一つであり、本学と管理機関を同じくする和歌山信愛大学とともに、本事業の学びが十二分に活かされるカリキュラム開発を行う。
- ・次年度より新たにコンソーシアム参加機関となる株式会社マイナビとともに、同社探究プログラム「Locus」のバージョンアップ版を協働開発し、その活動を通して得た知見を本学の新たなカリキュラムへと反映させる。

⑨ 運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

年間2回運営指導委員会を開催し、その段階までの活動および今後の活動に対する報告の後、指導助言をいただいている。なお、本学の運営指導委員のメンバーには2名首都圏在住の方が含まれているため、今年度はオンラインで実施した。事前に会議資料を送付し、指導助言の必要な部分に対する意見を会議開始前にGoogleフォーム上へ入力していただくことでより深い議論となるように工夫をした。

⑩ 類型毎の趣旨に応じた取組について

グローバル型という類型を踏まえ、「リージョン探究」ではローカルな社会課題、「グローバル探究」ではグローバルな社会課題を取り扱い、「キャリア探究」ではその2つを掛け合わせることで、生徒たちには「グローバル」を意識させている。また、「英語運用能力向上プロジェクト」として「オンライン英会話」などの取り組みや、今年度は実施することができなかったものの、リーダー研修として位置付けているカンボジア研修を組み合わせ、「世界」を意識させながら、本学の目指す「Key Girl」の資質を育成している。

さらに、今年度は名古屋石田学園星城高等学校の呼びかけにより、「全国高校生フォーラム」の代替となる「Glocal High School Meetings 2021」に本学も協力校という立場で参加した。コロナ禍において海外研修やイタリア修学旅行などが軒並み中止となり、英語を学ぶ意義が見えにくい状況において、同じ高校生が英語を流暢に使いこなす姿を見る機会を持てたことは、生徒にとって大きな刺激となったようであり、次年度も同様な形で参加するつもりである。

⑪ 成果の普及方法・実績について

a 普及方法

- ・推進校 HP において本事業の専用ページを作成し、情報を発信する。

- ・ 研究成果発表会を実施し、県内外の各種学校および地域に対して広く参加を依頼する。
- ・ 各種マスコミに本事業に関する取材を依頼し、ニュースや新聞等で配信する。

b 実績

- ・ 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面型の活動については、地域や保護者などの理解を得にくいと考え、あえて HP 等での発信を自粛した。
- ・ 今年度の研究成果発表会を中止とした。なお、次年度はオンライン発表会の可能性も含めて必ず研究成果発表会を実施する予定である。
- ・ 地元テレビ局にて本事業の取り組みが 1 度取り上げられた。

c コロナ禍を踏まえた新規実施

- ・ 株式会社マイナビと連携し、同社の探究学習教材「Locus」に、本学の探究学習のプログラムおよび成果を加味したバージョンアップ版を作成する。
- ・ 本学海外交流アドバイザーである HAPPY SMILE TOUR 伊東邦将氏とともに、動画とオンラインを組み合わせ、日本にいながら衝撃を味わうことのできるオンライン海外研修（カンボジア）プログラムを作成する。

1 1 目標の進捗状況、成果、評価

a 目標設定シートの項目設定について

申請時点で設定した目標の中には、With コロナの時代における目標としては、理解の得にくいものや、実現が難しいものも含まれていたため、1月28日提出の目標設定シート提出の段階で変更を申請している。コンソーシアム参加機関に「密」の恐れがあるイベントの開催を依頼することや現時点で海外研修や留学、インターンシップへの参加を推進する目標は凍結し、比較的上手く ICT を用いた教育環境に移行することができた部分をプラスと捉え、通常ならば距離の壁があって実施できなかった遠隔地の方への調査活動や、新しい探究学習の教材開発を行う方向へと転換し、成果をあげていきたいと考える。

b 令和 2 年度の目標の進捗状況

① 「リージョン探究」・「グローバル探究」の完全実施

初年度は、現高校 2 年生に対して完全実施を行うことができたが、今年度は内容を変更せざるを得ない状況となり、予定通りの内容・期間で実施することができなかった。しかし、ICT 環境の充実もあり、ほぼ同内容のプログラムを実施することができた。

② 「キャリア探究」の部分実施

プレ学年である高校 3 年生を対象に部分実施を目標としていたが、昨年度の「グローバル探究」のプレ実施を通して当該学年の生徒に変容が見られたこともあり、対象学年の教員団からも理解を得ることができた。そのため、新型コロナウイルスの影響を受け、実施内容では変更を余儀なくされたが、学びの質としては次年度の本格実施とほぼ同程度のものを実施することができた。

③ 「英語で学ぶ」「ミニ探究」授業開発

新型コロナウイルス感染拡大防止のための休校措置で、本学の学びも大きく変わった。生徒たちの学びを止めないために、急遽 Classi を導入し、動画授業を作成、配信する形で対応することとなった。学校再開後も再びの休校措置の可能性と、ICT 教育のさらなる活用を目

指し、AppleTV や iPad を使い、「ロイロノート for School」「GoodNotes」などのアプリの活用した授業開発が一気に進んだ。そのため、学校としても ICT 教育への移行を優先し、今年度は上記の授業開発を凍結した。次年度は、再開の予定であるが、「探究」や「英語」に「ICT」も掛け合わせた授業開発となるのではないかと次年度の成果には期待が持てる状況である。

④ 本事業の内容理解の共有

i 生徒

本来は、入学後すぐの研修合宿において本事業の内容や育成したいと考えている資質について説明することになっていたが、本年度は合宿そのものを実施することができなかつたため、急遽オリエンテーション動画を作成、配信することにした。当初気付いてはいなかったが、動画を配信したことで、生徒たちは繰り返し視聴することが可能となり、結果的に内容理解が深まった。

ii 保護者

昨年度は、本学の体育館およびホールで行われた対面型の発表会に保護者を招くことで、本事業の学びや意義を理解していただいていたが、どうしても一部の保護者に限られることが課題であった。しかし、今年度は図らずも発表動画を配信することになったため、結果的に多くの保護者の方に発表を見ていただくことができた。また、「Glocal High School Meetings 2021」の HP の URL を共有し、他校の発表動画や立教大学松本教授の講話動画を視聴する機会を提供できたことで探究学習の価値についての理解が進んだように感じている。

iii コンソーシアム

保護者同様、他校の発表動画等が本事業への理解を深めることにつながったが、第3回のコンソーシアム運営会議を第1回運営指導委員会とオンラインで合同開催したことも一つの契機になったと捉えている。本学の運営指導委員である Future Skills Project 研究会の平山恭子様、産業能率大学の渡邊道子様の両名は探究学習に造詣が深く、その指導や助言を直接耳にする機会を提供できたことで、コンソーシアム参加機関の意識の変化につながりつつある。

⑤ 海外研修の合同研修会

SGHアソシエイト時代より実施してきた海外研修（カンボジア）をより深めるため、同じカンボジアをフィールドに海外研修を実施している他校とともに合同研修会を実施してきた。今年度は本学が幹事校として和歌山で開催することになっていたが、新型コロナウイルスの影響を受け、本校のみならず他校もカンボジアを訪問することができなかつた。また、例年1月上旬に合同研修会を実施していたが、全国から宿泊を伴う形での実現には無理があり、現地カンボジアと各校をオンラインで繋ぎ、オンライン合同研修会を実施した。

c 成果および評価

① 生徒の変化

i 本学生徒の本プログラムに対する意識の変化

本事業の指定2年目、SGHアソシエイト時代も含めると本学の探究学習にも歴史が感じられるようになりつつある。学校の中に探究学習が当たり前のように存在するようになったことで、生徒にも明らかな変容が見られ、各設定科目終了後のアンケートの以下の項目からも生徒の明らかな意識の変化を感じることができる。

高校1年生（2期生）

- ・「リージョン探究」に楽しみながら取り組むことができた 82.4%
- ・「リージョン探究」の活動を通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった 97.9%

ii 本学生徒の地域の未来に対する意識の変化

本事業の指定2年目が終了を迎えているが、プレ学年であった高校3年生も含み、目標シート1-bの「将来地元に戻り、地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合」という項目で87%（631人中の555人）という結果が出たことには大きな驚きを感じている。前述した通り、本学の目の前となる和歌山市内のまちなか地域に4つの新しい大学が設立されるという環境の変化も影響は与えているとは考えられるが、本事業の開始の前年度が10%（ただし、本年度よりClassiによる集計方式に変更している）であったことを考えると、生徒の意識には顕著な変化が見られる。カトリック教育により「奉仕・貢献の心」を身につけている本学の生徒たちに「地域の抱える課題と予測される未来」という情報と「地域の課題に対して真摯に向き合う大人の姿」を見せるという本事業のねらいは大きな成果をあげていると言うことができるだろう。

iii 育成を目指す人材像「Key Girl」への到達実感度

昨年度の大きな反省点は、本事業を通して育成を目指す人材像「Key Girl」の8つの資質について、しっかり生徒に告知できなかったことである。そのため、今年度は節目ごとに「Key Girl」の8つの資質について告知することにした。年度当初の休校措置もあり、オリエンテーションを限定公開の動画で行ったことも幸いし、生徒たちは時折動画の内容を確認しながら探究学習を行ったため、「Key Girl」を目指し、8つの資質を向上させたいという運営の意図が伝わったようである。さらに、リフレクションを通して成長の実感を確認する機会を設けたことで、生徒たちは本事業を通して育成したいと考える資質をしっかりと理解することができた。すでに文部科学省にはアンケート結果を報告しているが、本事業の2期生となる高校1年生がプレ学年の高校3年生、1期生の高校2年生よりも8つの資質の向上を実感できている割合が高いことは大きな成果と考えている。

iv 卒業生の進学先の変化

当時は「探究」という言葉を意識していなかったが、本学が地域課題をテーマに探究学習を行うようになって、丸8年が過ぎようとしている。当初和歌山市と連携し、まちなか地域の再生問題に高校生が取り組むという話題性からまちなか地域の再開発について地域住民の関心を得たいという行政側の意図もあり、本管理機関が運営する和歌山信愛大学を含み、次年度にはまちなか地域で4つの新しい大学が設立されることとなった。これまで進学先となる大学そのものが存在しないという理由で県外に流出していた学生の流れは明らかに変化し、本学生徒の地域の大学に進学する割合も当初の想定以上に高くなっている。

② オンラインでの調査活動の定着

今年度は新型コロナウイルスの影響で、生徒自身が学外で調査活動を行うことが難しい状況となった。そのため、Zoom等でのオンラインでの調査を推奨したところ、思った以上に定着した印象を受けている。今年度実際に何らかの形で調査活動に協力をいただいた企業や団体の数は100を超えている。

③ 他のグローバル校等との連携

2020年度の「全国高校生フォーラム」が開催されない旨の発表を受けて、初年度の合同連絡協議会を縁に個人的に連絡をとるようになっていた名古屋石田学園星城高等学校より「全国高校生フォーラム」に代わる発表会をとともに計画できないかと打診をいただいた。本学は

小規模な学校であるため主催校として手を挙げることはできなかったが、微力ではあるものの協力校として「Glocal High School Meetings 2021」の開催に向けて尽力した。もちろんコロナ禍において生徒の発表の場を設けるという点で大きな成果があったと感じているが、それと同時に、発表会の内容などを考えていくという過程を通して、本事業を運営する難しさや互いの運営における工夫などを学校間で共有できたという点に大きな成果があったと感じている。行政の積極的な支援を得にくい私立学校は、どうしても自校の中で模索しながらの運営を行っている。今後、その不安を指定校同士の横のつながりで多少なりとも払拭できるような機会を提供していただけると、本事業のさらなる成果へとつながるのではないかと感じられた。

1 2 次年度以降の課題及び改善点

a 成果発表会の実施

昨年度は当初の計画よりも1年前倒しで成果発表会を実施することができたが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、保護者やコンソーシアム参加機関からの理解を得にくいと判断し、年度の当初に成果発表会の中止を決定してしまった。次年度に関しては、本事業の指定最終年度ということもあり、外部施設での対面型による実施を目指す、難しい場合に備えオンラインでの成果発表会開催を模索する。

b With コロナの時代における創意工夫に満ちた本事業の運営

年度当初は新型コロナウイルスの影響を受け、我々運営側も消極的になり、安易に中止という方針をとる場面が多かったが、学校再開後は、オンラインを活用しながら当初の計画に近い活動を行うことができるようになりつつある。しかし、発表を動画形式としたことで撮り直しが可能となったことや、質疑応答の機会が失われたことなどからコミュニケーションスキルの育成などにおいて新たな課題が生じている。我々運営側も、答えが一つとは限らない課題と向き合い、本事業に取り組む生徒たちの指針となるような活動を行っていきたい。

c ルーブリック評価の精度の向上

本学では各プログラムにおける評価に独自のルーブリック評価表を作成し、運用している。しかし、人間関係を配慮してか、他者評価は甘く、自己評価が厳しくなる傾向が強く見られる。次年度は各教科にもルーブリック評価を導入するなどして評価する機会を増やし、精度の向上を目指す。

d カリキュラム マネジメントの推進

今年度は、新型コロナウイルスへの対応に追われ、2022年度に向けて「探究」を軸とする本学独自のカリキュラムの作成が進まなかった。しかし、本学では2022年度より中学3年生段階から「i (inquiry) コース」を新設することも決定しており、カリキュラム マネジメントは急務と考えている。

【担当者】

担当課	地域協働事業運営委員会	T E L	073-424-1141
氏 名	大村 寛之	F A X	073-424-1160
職 名	地域協働事業運営委員長	e-mail	utakanarin@yahoo.co.jp